ダンボールコンポストの作り方

① 用意するもの

1．ダンボール（硬い箱がよい）
　例）ヨコ４６㎝、タテ３２㎝、高さ２９㎝
2．腐葉土１８ℓ
3．米ぬか７ℓ（≒2.8kg）　※約 0.4kg/ℓ
4　ガムテープまたはクラフトテープ
5　新聞紙・市報・ダンボール（いずれか１部）
6．虫除け用布製カバー
7．ハンドシャベル（先が丸いもの）
8．風通しをよくするための台（苗かごが便利、
　無ければブロックなどに乗せる）
9．温度計（発酵している温度を確認する）

②　ダンボールコンポストの作成

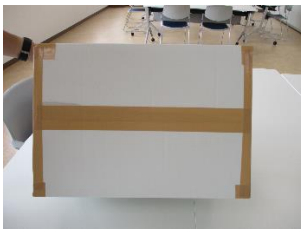
1．ダンボールの底の外側から、縦のつなぎ目と横の辺をテープでH字に貼る。
2．ダンボールの底の内ぶたを上げ、底の縦のつなぎ目を内側からテープで貼る。
3．ダンボールの底の内ぶたを下げ、下がった部分と底の中央をテープでH字に貼る。
4．ダンボールの上ぶたを全て内側へ折り曲げ、４辺をテープで貼り固定する。
5．ダンボールの底の四隅を外側からテープで貼る。
6．箱の底に新聞紙やダンボールを敷く。
7．腐葉土と米ぬかを半分ずつ箱に入れ、よく混ぜる。
8．残り半分の腐葉土と米ぬかを箱に入れ、よく混ぜる。

1

2

3

4



5

6

7

8（完成）

③　ダンボールコンポストの利用方法

１．風通しをよくするために、苗かごなどの台の上にダンボールを乗せる。
２．虫が入らないように不要なシーツなどで箱の上部を覆う。
３．置く場所は風通しのよいところがよい。屋外に置く場合は雨に当たらないように、板やビニールなどで箱をカバーする。
４．生ごみを入れる場所を４区画に分ける。（上から見て十字に分けるイメージ）
５．１つの区画に穴を掘り、１日分の生ごみを入れ、その上に米ぬかを一握りか二握りかけてよく混ぜる。
６．区画を毎日変えて、５の作業を行う。
７．定期的に全体を混ぜる。

④　投入する生ごみ

１．人が食べられるものは、投入できる。投入できる生ごみの量は１日１kg まで。
２．生ごみを出来るだけ細かく切る。
３．水切りは不要。
４．生ごみを入れない日があってもよい。
５．発酵分解が遅いものは入れない方がよい。例えば、玉ねぎの皮・貝殻・鶏の骨・とうもろこしの皮や芯・梅干しの種・ナッツ類の殻・タケノコの皮など。
６．柑橘類の皮は細かく切って投入する。卵の殻は握りつぶして細かくして投入する。生魚のアラや内臓、肉類は慣れてから投入する。
７．腐敗したものは入れない。
８．プラスチックや紙類などが紛れ込まないように注意する。

⑤　温度管理

１．土が乾燥しているときは、土がしっとりした状態になるまで水を入れる。
２．表面に白いカビや糸状菌が発生するのはうまく発酵している証拠。
３．温度計を使って、コンポストの温度を測る。発酵温度は夏５０℃以上、冬１０℃以下のときもある。外気温以上の発酵熱が出ればよい。
４．春から秋にかけて温度が上がらない時は、米ぬか不足か水分不足が原因のため、米ぬかや水分を足して、しっとりした状態にする。微生物は土の水分が５０～６０％のときに活動が活発になり、繁殖しやすくなる。
５．冬は温度が上がらないため、生ごみを細かく刻み、米ぬかを多めに入れ、箱を毛布などで包み保温をする。使用済み食用油を入れると温度が上がる。
６．発酵の盛んなときは、水蒸気が沢山発生するので、土の上に新聞紙を置いて、水分を吸収させる。
７．虫が発生した時は、乾いた土と多めの米ぬかを入れてよくかき混ぜ、温度を上げる。どうしても虫が気になる時は使用を中断して、死滅を待つ。

⑥　堆肥として使用

１．生ごみを入れ始めて３ヶ月ほど経つと、生ごみの分解が進まなくなるので、生ごみの投入を終了する。生ごみ投入終了後は１～２ヶ月ほど発酵させて熟成させる。その間、１週間に１度くらい水を加えて、土をよく混ぜ、しっとりさせる。

２．堆肥として使う場合、堆肥と土の割合は１対４。プランターでは堆肥１～２握り分を土によく混ぜる。

３．ダンボールは使える状態であれば、もう一度使う。

※この手引きは、以下の資料を参考に作成しました。

・クリーン武蔵野を推進する会発行「段ボール法　生ごみ活かす君」

・日野市生ごみリサイクルサポーター連絡会発行「ダンボールコンポストをはじめよう！」

問合せ　小平市環境部資源循環課推進担当
電　話　０４２－３４６－９５３５